



九州産業大学学生の 英語教育に対する経験と認識

語学教育研究センター
講師

TAYLOR Samuel



研究シーズの紹介

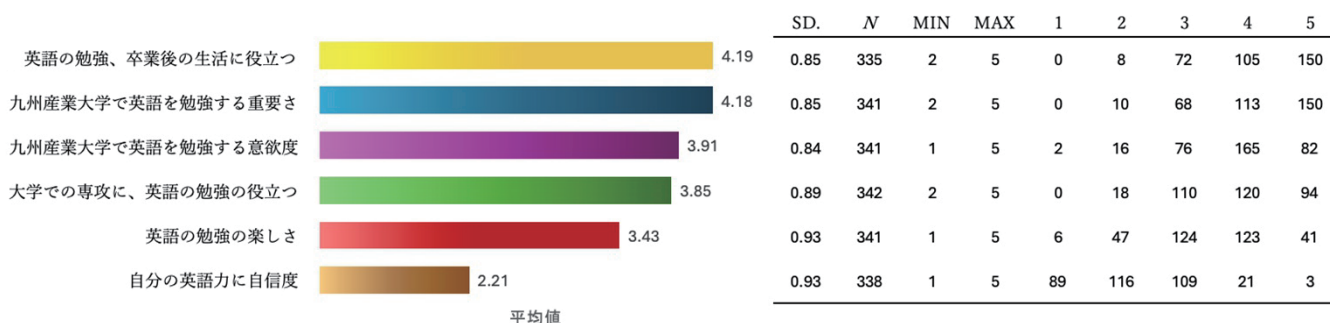
コミュニケーション能力の育成を目的とした実践の難しさ (Butler, 2011) は、EFL教育における適切な教育法と学生の興味喚起 (Kang, 2004) の重要性を浮き彫りにしている。英語スピーキング調査は、学生の主観的な経験やニーズを調査し、教育法に関する制約や嗜好を明らかにするために考案され、九州産業大学の学生に実施された。この調査は、学

生の信念とカリキュラム・デザインに関する研究に基づいており、英語教育に対する学生の経験や認識は、学生、教師、教育法の相互作用の性質に影響を与えるため、教室での指導の効果において重要な要因であると仮定している (Matsuura et al., 2001)



認識、教育法、 使用の整合性

- 学生は、国際化・グローバル化した社会における英語の有用性を認識しているが、それを使いこなす自信はない。
- 学生は英語をネイティブ・スピーカーとの会話として捉えているが、発展途上国の非ネイティブ・スピーカーとの文書作成による使用が一般的である。

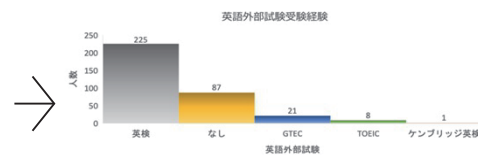


期待される活用シーン

- 九州産業大学の学生はどのような英語教育経験を持っていますか？



留学や受験などさまざまな英語体験や、中学・高校の英語授業における英語学習の種類の頻度などが参考になる。



- 九州産業大学の学生は英語についてどう考えているか？



英語の楽しさ、モチベーション、自信、重要性、有用性に関する学生の認識が参考になる。

